旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇2◇

人となり・生涯

日本の宗教や文化に共感

若松　秀俊

フリッツ・カルシュは第一次世界大戦に志願兵として従軍した後、マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下として哲学を学んだ。一九二三年に哲学博士の学位を取得、以後人智学の研究組織に加わった。

日本に強い興味を抱いたのは、一九一一（明治四四）年、十八歳の時にドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と出合ったことによる。

大正十四（一九二五）年九月末、憧れの日本に来た彼は松江市奥谷町の官舎に住んだ。そして昭和十四年三月にシュヴァルベと交代するまで教壇に立ち、この地で妻エンメラとの間に長女メヒテルト（昭和三年生まれ）、次女フリーデルン（同十二年生まれ）に恵まれた。

カルシュは絵画が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁ケ島、袖師ケ浦、大山、山陰の農村、さらに軽井沢近辺のパステルを撮影した、千五百枚を超える貴重な写真を残している。

彼は松江高等学校で生徒にヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げた。当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著述には『カントとハルトマンの比較論述』（日独文化協会、昭和三年）があり、そのほかドイツに関する著述（同協会、同九年）もある。

同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は、彼の紹介と協力によるものであった。また、長屋喜一元東大教授と『ハルトマン哲学』の著書を残している。

昭和十二年、復活祭の期間に英語講師のウッドマンの住む隣家が火の不始末から火災に遭ったが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます彼を日本好きにした。

カルシュに関しては、門下の酒井勝郎が『田舎の大学』（私家版、昭和四十五年）で記述し、また同窓会誌『翠松』や旧制松江高校史の『書のふもとに』で、その人柄を当時の生徒が語っている。

カルシュの描いた大山

松江高校を離任した彼は、ドイツ大使オットの仲介で昭和十五年から二十年まで国会議事堂近くの大使館に勤務することになり、そこで終戦を迎えた。

彼は、日本の宗教や文化の多様性に対する共感や、人間肯定のために想像力の世界を自らの精神に描くことの重要性を語り、人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。現在、米国に住む長女らが整理中である。

内容は、哲学史と有史以来の人の意識の進化に関すること、また学問や内的修練により、シュタイナーの思考にいかにして到達可能か、についてである。行動的人智学者としてこれを広めようとしたが、戦時中のドイツではこの関連学会は禁じられた。

また、宗教哲学への興味から、高野山で修業を体験し、著名な哲学者の西田幾多郎や宗教家の鈴木大拙らとの親交もあった。

両親から影響を受けた長女は、戦後自らその研究を行い、次女はマールブルク大学で政治学と地理学で学位を取得し、自由ヴァルドルフ学校の教員になった。この学校は、日本では「シュタイナー学校」と呼ばれ、その全人教育には興味深いものがある。

昭和二十二年に帰国したカルシュはマールブルクで成人教育に従事し、そこで在独日本公館や日本の著名人との親交をもった。同三十六年には年金生活に入り、キリスト共同体の古巣のカッセルに移住して研究を続けた。

四十三年には、かつての生徒から招待を受け、日本各地を訪問し、彼らと親しく過ごす時間を得た。この時、彼は出雲大社で、至聖の神に対面する願いがかなえられ、日本における自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。約一カ月の滞在後、帰国した彼は四十五年に金婚式を祝ったが、翌年、脳腫瘍のために亡くなった。

カルシュは少年期に夢見た風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたという。

筆者は、戦中戦後の混乱のためにカルシュの足跡の記録が乏しくとも、松江と東京での奉職期間からいって、有形・無形の功績が少なくないと確信していた。彼の足跡と言動を少しずつ確認するなかで、残り少ない教え子がいまなお彼を心底から敬慕していることを知り、改めて業績を詳細に調べる必要性を痛感している。

（東京医科歯科大学大学院教授）